

郷土博物館主催講座
「再発見八千代」
利根川東遷の川筋を探る
バスツアー参加記
羽計 一宏

2006年2月26日に、市立郷土博物館主催講座「再発見八千代」利根川東遷の川筋を探る、バスツアーが開催された。この講座は昨年6月5日に開催された印旛沼開発の史跡をたどる、のシリーズで、定員の2倍以上の応募があったという人気講座である。

今回の見学地は千葉県立関宿城博物館（利根川の東遷）、渡良瀬遊水池、権現堂堤で、講師は郷土歴史研の牧野さんと滝口さんである。

釈迦に説法だが、八千代は新川・印旛沼を通じ利根川につながっている。利根川より船が平戸まで来たそうだし、利根川の増水で新川が氾濫し「日光水」と恐れられたそうである。その原因は徳川家康により、それまで東京湾に流れていた利根川の流れを、銚子方面に変えられたこと（いわゆる利根川の東遷）にある。見学地はその利根川の大改修が行われた舞台である。

利根川の東遷：関宿城博物館



県立関宿城博物館にて
(郷土博物館提供)

関宿城博物館の太田さんより利根川の東遷について説明をうけた後、4階の展望室にのぼり江戸川と利根川の分岐点の様子を眺め、1階の展示室で利根川東遷の資料や模型を見学した。

1590年徳川家康が江戸に入府して間もなく、1594年に利根川の大改修工事は始まった。徳川家康が当初、どこまで改修する積もりだったか知れないが、60年後の1654年には現在の水系

の基礎が出来上がった。その結果、江戸の水害が改善され、武蔵国の耕地は江戸中期には2倍になった。銚子～関宿～江戸の水上交通ルートができ、また、川は堀と同じように要塞にもなった。東北方面に対する要塞だったというのが、関宿に設けられた関所では入鉄砲と出女を特に厳しく取締まったとのことである。何だか良いこと尽くめであるが、八千代にとってはどうだったのだろうか。

渡良瀬遊水池

北川辺町スポーツ遊学館より渡良瀬遊水池を展望した。

元々この一帯は低湿地で、渡良瀬川、巴波川、思川、谷田川が集まって利根川に合流するところで、勿論以前からあったのだが、1885年、1890年、1896年に大洪水が起こり、更には鉾害問題も絡んでいた。

そこで、1910年より1922年にかけて、遊水池化の事業が行われ、その後何回かの事業を経て、ごく最近、現在の形になった。面積は八千代の約65%の33km²、総貯水量2億トンの広大な遊水池で、洪水調節と都市用水に役立っているほか、自然観察やレクリエーションのスポットになっている。

権現堂堤：幸手市

もと渡良瀬川の河道と考えられる権現堂川の、大きく曲がったところにこの権現堂堤がある。度々の洪水のため1576年に堤防が築かれた。長さ百間、高さ一丈八尺だったとのことである。この堤の上を歩き見学した。

1876年（明治9年）に明治天皇が行幸しており、行幸堤とも言う。1927年に川は閉められ、今は調節池となっており、堤は桜の名所である。雨の一日であった。



権現堂堤
(郷土博物館提供)

平成18年3月19日(日)
品川歴史館と
大森の史跡
斎藤 君代

コース 10:30 JR大森駅集合
→品川歴史館→昼食→大森貝塚遺跡庭園見学→品川区・ポトランド市姉妹都市提携記念の碑、史跡「大森貝塚」碑を見学→加納久宜「遺徳碑」を見学→蜜巖院（真言宗八幡山）で阿弥陀如来供養塔、お七地藏菩薩像見学→16:10京急大森海岸駅で解散



昨夜からの雨が残り、雨傘持参の歴史散歩になったが、JR大森駅改札口に参加者21名が集合。出発予定の10時30分頃になると雨も上がり青空でのスタートとなった。

村田会長より品川歴史館に収蔵されている利田家文書（かがたけ文書）を全員で調べ、①大和田新田に建立されている成田山参詣道標寄進者「品川宿和国屋」と伝馬を探索。②臼井光勝寺坂下の分岐点に所在する、文化3年建立道標台座に刻字された品川新宿二丁目講中の人名を探索することを目的とするという話があった。

1. 品川歴史館

11時すぎに同館に入館（入館料は100円 70歳以上無料。）11時45分まで館内常設展を観覧した。品川宿の宿並模型、床に埋め込まれた宿並図により宿場の全容をみる。道幅5間（約9m）、南北19町40間（約2145m）で高輪町境から大井村まで家並みが続いていた。

歴史館に展示されている品川宿並模型は、1845年（弘化2）頃の「品川宿宿並図、伝馬役・

歩行役（かちやく）図」をもとに東海道分間延絵図などを参考に復元されたものである。



和國屋

13時半頃まで1階小講堂において利田家文書（立正大学・品川区教育委員会）を全員で手分けして、品川宿（南品川）の名主・旅籠屋を調べ和國屋のつく人名や講中の人名を拾い出す作業を行い資料を約60枚コピーした。

2. 大森貝塚遺跡庭園

大森貝塚は1877年、モースによる東海道線の汽車中からの発見にはじまる。

1984年に品川区が国際交流の一環として、E・S・モース博士の生誕地、アメリカ合衆国メイン州ポートランド市と姉妹都市提携を結んだのを記念して整備された庭園である。

3. 加納久宣「遺徳碑」

大田区立入新井小学校フェンス際に建立されている。

加納久宣は幕末の上総一ノ宮藩主の時に私領返上、廃藩置県を提唱した。

現在の山王公園前に屋敷があり、地元の教育普及や産業振興に尽力し、大正8年72歳で没。谷中墓地に墓所がある。

4. お七地蔵



蜜巖院（真言宗八幡山）にある鈴ヶ森で処刑された八百屋お七を祀ったお七地蔵を見学。

今日は、いろいろと実り多い一日であった。案内して下さった牧野副会長をはじめ参加の皆様お疲れ様でした。

平塚 胖会員の研究発表

『八千代市の狛犬たち』

に万雷の拍手！！

佐藤二郎



平塚 胖会員が昨年度市民文化祭に発表された内容にその後追加調査した事柄を加えての発表をお聞きした。

『自分もそうであったように、狛犬は誰もが出会っていながら、深い関心を持たれずに通り過ぎられてしまう存在』であった。そのことが大きく心を動かしたとのことであった。

カラー表紙の資料とOHPの詳細資料とによる1時間の説明でした。

1・文化祭展示内容の説明

文化祭展示内容を次の事項について述べられた。

①基本データとしては市内調査神社総数は64社、そのうちで狛犬建立数は43対。この43対の詳細データ調査（設立場所、設立年月、石工名、狛犬のサイズ・高さ、長さ、幅、狛犬の形状、尾の形状など）を実施した一覧表。

②設立年代については江戸時代から平成まであり、一番多い年代は明治時代の16対、昭和代の10対、平成代の6対、江戸時代の5対などとなっている。

③石工者数は個人石工と石材店名との8名（店）の確認はできるが、不明なもの（個人名、店名の刻まれていないもの）が22対あった。石工は廣瀬音五郎（鷺沼）の9対が最多で、あとは3対以下の勘次郎（船橋宮坂）、小川忠三（ケミ川ハシ本）、金子長十（船橋川端）等である。

狛犬の型式として狛犬の形状と尾の形状について取りまとめている。狛犬の形状として43対

が86態の形をしている。「親子で子下（前向、横向）」が34態、「単純に蹲踞」が26態、「玉を押えている」が15態、「獅子の子育て（谷へ落とす）」が4態などとなっている。尾の形状に注目して見れば「尾が渦巻き流れている」が22対、「尾がたっている」のが15対などとなっている。

⑤一番古い狛犬は年代の明確なもので七百余所神社の鳥居側の狛犬で天保6年（1835年）のものであった。

ただし、狛犬の形状について詳細に研究してみると、古いタイプの狛犬は『角がある』。七百余所神社の狛犬には角がなく、飯綱神社拝殿前の狛犬には設立年代が記されていないが角があり、平塚氏の見解ではこれが一番古いものであると推察しているとのことです。

最近のものは石工名がなく中国や韓国からの輸入品で装飾品的なもので、本来の狛犬の風格が備わっていないとのことである。

2. 追加調査資料の説明

文化祭以降の追加調査資料として次の3神社の狛犬を確認した。

・東福寺境内上の三十番神

文化祭開催中に豊田市長がご来場され、市長が子供の時に遊んだ神社の狛犬が無いとの指摘を受けたということであった。三十番神とはひとつの神様が一日を守ってくれるとして、一日ずつの神様が30神安置されている神社である。

・神明社

（大和田新田・貞光寺野）

昨年暮の大和田新田のフィールドワーク時に確認したものである、296号BP新設時に現位置に移築されたもので、調査時持参した地図に神明社が記載されていないために、調査漏れであった。

・台町稻荷

（下市場・八坂神社の上）

一般にはお稲荷さんには狐が鎮座しているものであるが、当稲荷は例外的で狐でなく、狛犬

が設置されている。何故狛犬か？と当時の総代の子孫の方にお聞きしたところ、笑い話のような事実があった。

それは設立の時に総代と神主とが相談していて、「狐の像は痩せていてみずぼらしい姿に見えるので、ガッチリした力強い姿の狛犬にしよう」ということであったとのこと（会員の笑が聞こえた）。

3・石工の狛犬デザイン特徴

・検見川の石工 小川忠三

小川忠三の狛犬は、萱田町大和田坂上の「時平神社」（明治32年）と神野の「熊野神社」（大正2年）の2対ある。「子供が親を見上げている」姿で2対とも同じデザインであり、また尾の形は「尾が渦巻き流れている」タイプである。

・鷲沼の石工 廣瀬音五郎

廣瀬音五郎のものは9対あり、「親子狛犬」が特徴であり、また「玉を押さえている狛犬」も特徴である。村上の「根上神社」の狛犬は「親が子を谷に落としている」情景のもので、特に印象的であったとのことである。また尾の形は「尾が渦巻き流れている」タイプが殆どであり、「根上神社」の昭和55年設立のもののみが「尾が立っている」タイプである。

・船橋の石工 勘次郎

勘次郎のものは「狛犬の前足が浮いている（お手をしている）」が特徴で、お手をしているタイプのものが多いと考えている。

・船橋の金子長十

金子長十のものは2対あり、「単純に蹲踞している」ものとなっている。七百余所神社の狛犬（天保6年・1835年）と上高野の白幡神社の狛犬（明治13年・1880年）とは約45年の隔りがあり、同一人物ではなく何代か後の長十と考えている。

以上、配布資料、OHP画像そして明快な説明で、非常に解りやすく、実物を見ているような感覚でご説明を拝聴しました。万雷の拍手にて終了。

関和時男会員の研究発表 江戸の旅の発表

を聞いて

畠山 隆



2年前に市立郷土博物館で開かれた企画展示「江戸の旅」は、主として大和田宿を軸に成田詣の旅の様子を展示したもので好評だったが、今回、関和・佐藤二・佐久間の3会員は、同じ「江戸の旅」のタイトルで一步進め、幾つかの古文書と論文の中から房総にかかわる江戸の旅を取り上げて、その研究成果を関和氏が代表して発表された。

江戸時代も後半に入ると治安も安定し、江戸庶民は講などを募って金銭の余裕が生ずると気軽に成田詣や、札所巡りに出掛けたという。道中関所の身体改めも次第にゆるくなって、現代のわれわれが思っているほどには不安で不便な旅ではなかったらしい。

主要路は整備され旅籠も備わり、『旅行用心集』や『金草鞋』等の旅案内ガイドブックがあって、旅行者はそれを見ながら旅を楽しむことができたのだという。その十返舎一九が著した『金草鞋』本を見ると、道中の風景を描いた挿絵の周り一面に、道案内を記した江戸かな文字がぎっしりと詰まっていかに案内書らしい。でもこれが読めなければ役に立たない訳だから、江戸時代の庶民はこの程度の文字は大方読み書きができただろうと納得させられるのである。

園生村の名主家に残る『道行記』は房総札所巡りを日記風につづったもので、関和氏からその全文について日付を追って解

説していただいた。成田山を登って香取・鹿嶋の大神宮、常陸の国から上総・安房を廻って再び下総まで房総半島を徒歩で一周する旅行記である。参考資料として佐藤二郎氏が調べられた脚注と比較しながら読み進めていくと、現代の地名と違う箇所が処々あることがわかって地名の表現や変遷の面白さを知る。

その他、当時の物価水準や三貨制度についての解説、三度笠・やくざといった言葉の語源など、関和氏ならではの豊富な蘊蓄を披露され、たいへん有益な時間を過ごすことができたことを感謝いたしたい。

7/1～2 シンポジウム

「印旛沼周辺の弥生土器」

紹介

藤 由美

現在、「郷土史研通信」51号でご紹介した栗谷遺跡の弥生土器についてのシンポジウムを企画して、現在その準備を始めています。研究者と市民がともに手を結んで立ち上げたこのシンポジウムの実行委員会には、委員長に大塚初重氏、副委員長に熊野正也氏が就任され、当会会員も参加しています。

7/2のシンポジウムとその前日の市民講演会へのご来場、そして実行委員会への参加をぜひよろしくお願いたします。

○7月1日（土）13時～17時
☆市民講演会

「八千代は弥生文化の交差点ー栗谷遺跡の面白さー」

法政大学講師 小倉淳一氏ほか
○7月2日（日）10時～16時半
☆シンポジウム

「臼井南式設定の研究の歩み」

「栗谷遺跡の調査成果」

「『(仮)栗谷式』について」

熊野正也氏 鈴木正博氏

高花宏行氏 宮澤久史氏ほか

☆その他

栗谷・上谷遺跡出土

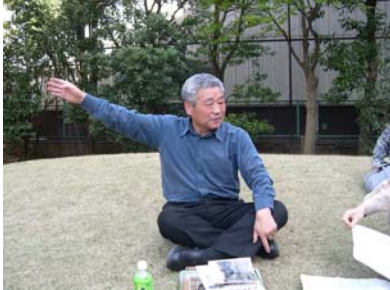
土器の展示

附加条縄文体験コーナー

☆会場：勝田台文化センター

4月22日(土曜)
大和田新田
旧酪農開拓農家
市東家訪問

佐久間弘文



酪農業開始の頃を語る市東氏

「日本の酪農発祥の地」でもある千葉県は現在でも全国順位第3位の牛乳生産県です。八千代市においても酪農の歴史は古く、特に戦後は大和田地区が県内でも有数の酪農地帯となっていました。本年度の大和田新田地域総合研究では、この地区の酪農研究を欠かすことができないようです。

当研究会創設時の会員でもあった市東国昭さんは、大和田新田で少年の時代から酪農と深い繋がりの中で暮らされていたお一人です。今回は同氏のご好意をいただき会員20名が同氏宅を訪問し、当時の酪農の様子をお聞きしました。

【酪農業開始の頃】市東家は終戦の前に八街から移住し、一反歩(300坪)の屋敷を持ったことが始まりであった。興真牛乳(当時は興真舎)から借地し、牛の餌を作って同社に納めることで暮らしを立てていたが、昭和23年の農地改革により1町歩(3000坪)、各酪農家で計7町歩をもらい受け、当初2~3頭から酪農を始めることになった。興真舎には牛舎が3ヶ所(現在の所在地でいえばマルエイ、村田牧場、現興真牛乳の3ヶ所)があったが、そこまで自転車の荷台で運ぶ程度の生産量であったが納入量が増えるにつれリヤカー、牛車が使われた。搾乳はすべて手

しぼりで1日3回、「マドロス」と称する作業者の応援を受けたが実につらい作業の毎日であったものの、安定した現金収入は経営規模を拡大に導いた。

【酪農最盛期の頃】昭和30年頃には最盛期を迎え、近辺はみな酪農牧場となった。市東牧場は近隣では最大の規模の牧場となり、近くの川口牧場、安原牧場、松橋牧場、池田牧場などに加え多くの酪農家が牧場経営にあっていた。当時乳牛20頭で立派な牧場と言われていたが、市東牧場は地下式のサイロ4基、最大54頭の乳牛をかかえる大規模牧場となった。京成バラ園ができたのが昭和33年、この頃から近辺の道路も次第に整備されてきた。

【経営転換期の頃】昭和36年頃に工業団地ができた。市東牧場は将来を展望した大きな変換の時期を迎えた。酪農業務を次第に縮小し、進出する工場を相手に有限会社「のんき屋」を手始めに創業、さらに広大な土地利用による造園業、道路管理業など5社に事業を拡大し、昭和40年になって乳牛を手離し酪農業は終焉を迎えることになった。

終始柔和な話し振りの中にも、苦しかった創業時代を回顧しながら現在までを語ってくれた市東さん、貴重な話を聞くことができ本当に有難うございました。

なお市東さんは「川柳」に大層な実力を有しているようです。『広報やちよ』4月15日号の「やちよ川柳」には堂々の第1席、「意地悪をする初孫と知恵くらべ」が掲載されておりました。

市東さんの話を聞いたのち一部の会員は市東家近くの塚の跡地を訪ねましたが、かすかな痕跡を確かめるだけでした。更に八千代霊近隣の大和田新田共同墓地に向かい、大和田新田に住住した祖先の墓や墓標を拝見させていただきました。

平成18年度第一回
市民活動サポートセンター
運営委員会報告

関和時男

平成18年4月17日(月)

18時~20時

市民活動サポセンにて開催

出席市側

課長小名木所長 蕨主査他

運営委員小原運営委員長他7名

スタッフ3名(臨時職員)

運営委員の目的

市民活動サポートセンターを利用する市民が、円滑且つ適正な利用ができるよう検討し、市に助言・提言することにより、センターの有効な機能や運営を保持、改善してゆくことを目的とする。

1)平成18年度運営委員会体制について

サポートセンターの役割

- ①情報と交流の場を提供
- ②事務的活動の場の提供
- ③情報の収集と発言の場を提供
- ④ネットワークを築く拠点

※設置検討委員会答申書より

・**広報担当** 八千代市民活動サポートセンターだより

「わ」の編集・発行年2回

・**研修担当** NPOフォーラム
IN八千代 等開催

・**交流担当** 市民活動サポートセンター祭りの企画・開催

2)平成18年度事業計画

5月8日午後6時~8時

3)事業報告会

6月14日午後6時~8時

4)センター移設について

移設場所 東京ステンレス前十字路左角地(ゆりのき台)

交通手段 八千代中央駅

徒歩約15分 駐車場7~8台

建て屋 2階建て

1階 サポートセンタ

2階 地域市民利用自治会利用

工事スケジュール

地域調査・設計 4月~6月

業者選定 7月

建築工事 8月~11月

フルサポセ12月初~末撤去

ゆりのき台 1月開設

石井さん、
明治期の稀観本を
県立中央図書館へ寄贈
佐久間弘文

会員の石井尚子さんは、4月15日同家に伝わる明治中期の稀観本2冊を県立中央図書館へ寄贈されました。この2冊は日本とアメリカの代表的な辞書という組み合わせで、同図書館も貴重な蔵書の提供に非常に感謝し、広く県民に供するとのこと。



●『言海』大槻文彦私版
明治24年刊 印刷所 秀英社
(大日本印刷)明治期の本格的な
国語辞典の創始。印刷・製本は
洋装、価格は当時としては6円
の高価。



●『Webster's International
Dictionary of the English
Language』1892, Noah
Porter 編集。確認されている
国内所蔵館が少ない貴重本で、
2011 ページに及ぶ G. & C.
Merriam 社版。
また、佐倉市中志津にお住まいの八重尾等氏から私に寄託された同じく明治期の書籍3点も4月12日県立中央図書館に寄贈いたしました。

- 『言海』大槻文彦私版 印刷も同氏。1889年(明治22年)版
- 『正寶玉篇字典大全』福井県士族 平山政流編輯 1886(明治19年)版
- 『詩韻含英異同辨校本一、二』大阪府士族 大岡讓校正 1879年(明治12年)版

9月以降の活動計画
9月10日(日) 全日
拡大役員会と例会
原稿締め切り・調査内容
・展示作品・機関誌打ち合わせ

9月24日(日)
博物館事業協力②
再発見八千代・吉橋大師と
文化財探訪(バス利用)

10月8日(日) 機関誌校正
史談八千代31号校正
・展示作品調整

10月29日(日) 全日
機関誌校正
史談八千代31号最終校正

11月3日(祝) サポセン祭り
フルルにて市民へ本会を紹介

11月12日(日) 全日
展示作品共同制作
文化祭展示作品制作共同作業

11月18日(土) 文化祭
会場準備(午前)
(午後) 一般公開
史談八千代31号発刊
郷土史研通信56号発行

11月19日(日) 文化祭
一般公開・(午前～午後4時)
会場片付け

12月17日(日)
見学会・反省会

平成19年1月7日(日)
見学会 新宿山手七福神めぐり

2月25日(日)
博物館事業協力③ 再発見八
千代・吉橋大師と文化財探訪

3月4日(日)
拡大役員会 学習会
平成19年度事業打合せ
大和田新田資料学習
郷土史研通信57号発行

3月18日(日) 見学会
歴史散歩

平成18年度の
主な事業予定

1. 本年度研究課題
・旧村の今
「大和田新田総合研究」
2. 「史談八千代」
第31号の発刊
3. 「郷土史研通信」
の発行
(5.8.11.2.各月)
4. 市内社寺奉納俳額句碑
等悉皆調査(継続)
5. 博物館事業への協力
「再発見八千代」の
行事に参加

新入会員紹介

大和田晶子 ゆりのき台在住
富永 滋 八千代台北在住
藤村 誠枝 勝田台在住

編集後記

本年度の定期総会も滞りなく終了した。新年度の役員新体制のもとで本年度研究課題・旧村の今「大和田新田総合研究」に会員全員で取りくみます。まず、4月22日市東氏のお宅に会員20名がお伺いして、酪農業開始の頃から現在までの旧村変遷のお話を熱心にお聞きしました。これからも、この地に残る数少ない古文書の発掘、善兵衛組(上区)佐五兵衛組(下区)の聞き取り調査等々、研究課題は多い。

編集子